

Title	相互行為への「身振り会話」論的アプローチ
Sub Title	An approach to interaction as "a conversation of gestures"
Author	草柳, 千早(Kusayanagi, Chihaya)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1988
Jtitle	哲學 No.87 (1988. 12) ,p.175- 201
JaLC DOI	
Abstract	In order to examine the process of our interaction with others, G. H. Mead's theory of interaction or "a conversation of gestures" is investigated. First, how Mead describes the process of interaction and how he defines and uses the term are examined. According to him, the process of interaction can be described as a conversation of gestures. Then, what is a conversation of gestures? To answer this question, the concept of "gesture" and the distinction between "(non-vocal) gesture" and "vocal gesture" are studied. Mead's definition of "gesture", its social behavioristic implications, and the function of gestures as mutual adjustment are presented. It is discussed that the distinction between those two kinds of gestures is not in their vocality, as explained by Mead himself, but in their "simultaneous-reflexivity" from the standpoint of the actor, and that, in spite of this distinction, each gesture that mediates a conversation is a united whole including both vocal (simultaneously-reflexive) part and non-vocal (non-simultaneously-reflexive) part as observed from the standpoint of others. Finally, the implications of the conception of interaction as a conversation of gestures are discussed, and further themes concerning this conversation, gestures and our process of adjustment are offered for future studies in our social interaction.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000087-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

相互行為への「身振り会話」論的 アプローチ

草 柳 千 早*

An Approach to Interaction as "A Conversation
of Gestures"

Chihaya Kusayanagi

In order to examine the process of our interaction with others, G. H. Mead's theory of interaction or "a conversation of gestures" is investigated.

First, how Mead describes the process of interaction and how he defines and uses the term are examined. According to him, the process of interaction can be described as a conversation of gestures. Then, what is a conversation of gestures? To answer this question, the concept of "gesture" and the distinction between "(non-vocal) gesture" and "vocal gesture" are studied. Mead's definition of "gesture", its social behavioristic implications, and the function of gestures as mutual adjustment are presented. It is discussed that the distinction between those two kinds of gestures is not in their vocality, as explained by Mead himself, but in their "simultaneous-reflexivity" from the standpoint of the actor, and that, in spite of this distinction, each gesture that mediates a conversation is a united whole including both vocal (simultaneously-reflexive) part and non-vocal (non-simultaneously-reflexive) part as observed from the standpoint of others.

Finally, the implications of the conception of interaction as a conversation of gestures are discussed, and further themes concerning this conversation, gestures and our process of adjustment are offered for future studies in our social interaction.

* (社会学)

はじめに

本稿は、G. H. ミードに焦点を当て、彼の議論に基づきながら、主としてその「身振り」及び「身振り会話」という考え方の検討を通して、われわれの相互行為へのアプローチを行う試みである。

G. H. ミードは、社会学史上、シカゴ大学草創期の社会心理学者、哲学者、プラグマティスト等々として、一般によく知られてきた。とりわけ、彼の名を、現在のように社会学を学ぶ誰にも馴染み深いものにしたのは、その希有な自己論であったし、またこうした自己論への言及を重ねながらそのアイディアの継承を論じた、ブルーマーのようなシンボリック・インタラクションニスト等であった。⁽¹⁾ その有名な自己論によれば、自己は、個人に、他者との相互行為のプロセスを通じて発生する。ミードは、それがどのようにして発生するのか、ということを、個人が他者との間で行為する、という文脈の中で、示そうとした。そして、周知の通り、このような他者との相互行為に由来する「自己」は、いったいどのような「自己」なのか、ということが多くの論者を引き付け、論議の的となってきた。これに対して、本稿は、逆向きの関心を持つ。すなわち、そのようにして「自己」を産出する「相互行為」とは、いったいどのような「相互行為」なのか、と。

筆者は、「G. H. ミードの『社会的行動主義』」(1987) で、G. H. ミードの方法論的アプローチとして従来知られてきた社会的行動主義を取り上げ、それが、ワトソン流行動主義を批判して掲げられた方法論という形をとりながら、一方で、人々の相互行為のプロセスをテーマ化するペースペクティブをわれわれに提供することを論じた。⁽²⁾ 本稿は、その続編である。つまり、この視点に立って、ミードの社会的行動主義に定位するならば、相互行為は、どのようなものとして論じられるのか、とい

うことを問題にするのである。

そのために、まず最初に、「相互行為」という概念が、ミードによってどのように取り扱っていたのかを確認する。それを踏まえた上で、次に、相互行為プロセスの論じられ方を、彼のいう「身振り」概念を手掛かりに検討し、相互行為のプロセスが「身振り会話」として論じられること、及びその含意を示す。最後に「『身振り会話』としての相互行為」が、われわれの日々経験している他者との相互行為に対して、どのようなアプローチを可能にするものであるのか、ということについて述べたい。

I ミードにおける「相互行為」

ミードは、人々が互いに行行為しあうことをどのように取り上げていたのであろうか。最初に、彼の議論における「相互行為」の取り扱いについて確認しておきたい。

ミードが相互行為についてどのように論じているのか、それを探る目的で彼の議論の中に「相互行為」という語彙を捜すことは難しい。実際、シカゴ大学から出版されているミード著作集及び論集の各索引にも「相互行為」なる語はリストアップされていない。とはいえ、ミードは相互行為について、以下のように述べており、そこから、彼が相互行為ということで、どのようなことを概念化していたのか、またそれが、彼の問題設定においてどのような位置にあるのかを、見てとることができるように思われる。

「やむことない相互行為において、ある個体の行為が、他の個体のある行為に対する刺激となり、そして、この後者の行為が、再び最初の個体にある反作用を起こさせる刺激となる等々……」(Mead: 1909: SW 101)。彼は、相互行為を、刺激とそれに対する反応、さらにそれが新たな刺激となって、新たな反応を喚起とする、という無限のやりとりとして、捉えて

いた。

このような相互行為について、ミードはさらに述べる。

「社会的相互行為というそもそもの状況がなければ、身体的な身振りも音声身振りも、意味をなさなかったことは明らかである」(Mead: 1909: SW 102) (下線筆者)。

「他者に向けられることによって、神経の興奮の単なる流出としての表現が、意味へと変化し、この意味が他の個人にとって行為の価値となる。そしてその感情表現に対する他の個人の反応…(中略)…が、コミュニケーション、共通の理解、社会的相互行為というフィールドにおいて人々が互いに抱いている態度の認識にとって最初の基礎を与えるのである」(Mead: 1909: SW 102) (下線筆者)。

「他者との相互行為のプロセス全体を通じて、われわれは、他者からの行為を分析している。その分析を、われわれは、相手の態勢の変化や次第に成り立っていく社会的行為の他の様々なししに対して本能的に反応することを通じて行っている」(Mead: 1910: SW 131) (下線筆者)。

これらの「相互行為」なる語彙を含む言明は、いずれも、「相互行為」それ自体を正面切って取り上げて論じているものではないが、そこには、相互行為ということをめぐって、ある共通の表現が含まれている。それは、第一に、言い方の違いはあれ、「社会的相互行為」というそもそもの状況」、「社会的相互行為」というフィールド」、「他者との相互行為」というプロセス全体」なるものがまずある、という前提であり、第二に、こうした「状況」なり「フィールド」なり「プロセス全体」においてこそ、われわれ個人個人は何らかのことを行っているということである。われわれは他者との相互行為のただ中にいる。われわれが日常様々な行為をしているということ——ここでは、身体的な身振り・音声身振りであり、互いの態度の認識であり、行為の分析——は、他者との相互行為という脈絡においてこそ捉えられ、まさにわれわれの行っていることとして、論じられるのである。

自己論という問題においても同様である。周知の通り、自己は、相互行為の中から生じ、相互行為のプロセスの説明を通して、その発生が説明される。

「自己は、行為の中に、個人が経験において彼自身にとって社会的対象となるときに生じる。このことが起こるのは、個人が、他の個人が用いるであろう身振りを用いたり、その態度を仮定して、自分自身に対して反応するとき、あるいは反応しようとしてそうするときである」(Mead: 1922: SW 243)。また「われわれは、他者のわれわれに対する態度を自分自身で取得する限りにおいて、自身の行為の中で自己となる」(Mead: 1924-1925: SW 284)のである。また、もうひとつのよく知られた概念、「一般化された他者」については、「もし彼が一塁手なら、内外野やキャッチャーから球が投げられる。このような組織化された反応を、彼は自分の中に取り入れて、別のポジションでプレイをする。そしてこの組織化された反応こそが、私が『一般化された他者』と呼んだものであり、彼の行動に伴い、それを制御するのである。そして、彼の経験におけるこのような一般化された他者こそが、彼に自己を与えるのである」(Mead: 1924-1925: SW 285)等々。

「自己」の問題も、「一般化された他者」も、相互行為を前提とするロジックの上で、論じられる、あるいは、相互行為という枠組みにおいて捉えられ、考えられようとしているのである。

従って、ミードの議論において、個人は、相互行為・内・存在として、特徴づけられている。「自己は社会的行為の内に生じる」(Mead: 1914 CL: IS 102/Mead: 1924-1925: SW 283)。そして、「社会的行為」とは、「同じ種に属する他の生物の刺激によって媒介されるもの、そして他の個体に再度影響を及ぼすような反応を引き起こすもの」(Mead: 1909: SW 135)、「同じ集団に属する他の個体の刺激のもとで生じる行為」(Mead: 1914 CL: IS 102)である。ミードの論じる、自己を持ち行為する個人とは、まさに、予め他者との相互行為のプロセスの内にある個人、いわば「相互行為プロ

セス・内・個人」であると言える。それも単に、個人が、他者と相互に行
為し合っているという理由からではない。まず他者との相互行為プロセス
があるので、その中でしか、自己を持った個人という存在を語れないから
である。

II 社会的行動主義の「身振り」概念

(1) 行為者の観点からの身振りの二分化——身振りと音声身振り

それでは、このような相互行為プロセス、個人に自己を生じるような相
互行為、われわれ人間にとて常態ともいべき相互行為のあり方を、ミ
ードは、どのようなものとして捉えていたのであろうか。このことを、ミ
ードの「身振り」概念を鍵として検討していきたい。

ミードが、相互行為のプロセスという脈絡の中で、自己の発生を説明す
るに及んで、「身振り」、「音声身振り」という概念を用いていたことは、
よく知られている。ミードにとって、個人が自己になるとは、相互行為に
おいて、自らの行為を通じて、自らが自分自身の社会的対象となること
であった。従って、自己が発生するには、相互行為のプロセスの中に、個人
にとって自分自身が対象化する契機が含まれていなければならない。それ
が、音声身振りである。かくして、音声身振りを用いた相互行為が、それ
以外の、非音声的な身振りによる相互行為から特化される。

後者、つまり自己を生じないような相互行為プロセスは、典型的には、
犬同士の争いという例を通じて示される。

「一方の犬が、他方に向って、今にもその喉に飛びかかるうとしている。
相手の犬は、それに対して、自分の態勢を整える。つまり、最初の犬
の喉に飛びかかるうとする。ここにあるのは、身振り会話、犬の態勢及び
態度の相互的な変化である」(MSS: 63) (下線筆者)。

ここでは、最初の犬の、相手に飛びかかるうとする様子が、相手への刺

激となって、もう一方の犬に、態勢を整えて相手に飛びかかるとする、という反応を喚起する。両者の相互行為は、すでに述べたように、刺激とそれに対する反応との連鎖として記述される。そしてこの時、両者のやりとりを、ミードは、「身振り会話」と概念化した。このような犬の「身振り会話」において、自己は生じない。

他方、対象としての自己を生じるような相互行為が描定される。それは「音声身振り」(vocal gesture)による会話である。

「人間の社会的な行為において、"Me", 対象としての自己を生じさせるものは、何であろうか。なぜ、人間は、社会的対象のかたちを、彼の環境というものから、内的経験へと移行させるのか。その間に対する答えは、音声身振りに関する聲明の中で、すでに示されている」(Mead: 1912: SW 139), すなわち「有声の音には、さらに重要な点がある。人は、自分の顔の表情や身体的な態度の価値を感じることはできても、それは不完全でしかない。だが、彼の耳は、自分の音声身振りを、隣の人と同様にはっきりと聞くことができる。人は、こぶしを上げるとき、第一義的に、相手に向かってだけそうしている。だが、彼は、話をするとき、相手に向かって話しているのと同じぐらい真実に、自分に向かっても話しているのである」(Mead: 1912: SW 136-137)。

「音声身振りは、特に重要である。というのも、それは、音声身振りを行った当の個人に対しても、他者に対してと同じ様に作用するからである」(Mead: 1922: SW 243)。

「……もし、音声身振りが、それを発した個人の中に、他者と同様の反応を生じる傾向を生起させるなら、そしてこの彼の中の他者の行為の端緒が、彼の経験の内に入り込むならば、彼は自分が、他者が自分に対して行為するのと同様に、自分自身に対して行為するようになっていることに気付くであろう」(Mead: 1924-1945: SW 287)。

音声身振りは、それを発した当人も、それを向けられた他者が受け取る

相互行為への「身振り会話」論的アプローチ

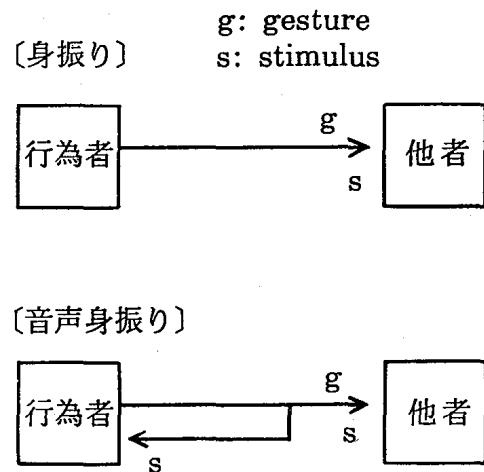


図 1

のと同様に受け取ることができる, とミードは言う. そしてこのことを通じて, 自分の発したその身振りに対して, 他者が反応するのと同様に反応する, ということが, 可能になると言う. 音声身振りを発した者は, 従つて, そこで, 自分を, 身振りを受け取る他者の態度を通して, 対象として見ることができる, すなわち, そこで, 自己になる, というわけである(図1).

さらに言えば, こうした音声身振りが, 他者と同様の反応を本人にも喚起するものであるならば, その身振りは, 有意味シンボルとされる. 「ある個人によって発せられた音声身振りが, 相手にある特定の反応を引き起こすなら, われわれは, それを, 行為のシンボルと呼ぶ. その音声身振りが, それを発した本人にも, 同様の反応を行う傾向をもたらすなら, われわれはそれを有意味シンボルと呼ぶ」 (Mead: 1924-1925: SW 288) のである. そして言語は, こうした音声身振り一有意味シンボルの最たるものである.

このような音声身振りの特別さ, つまり非音声の身振り (ミードの対比によれば, 音声に対して身体的な身振り) から音声身振りを分け隔てている性質を, 文字通り, 相互行為プロセスにおける自己の発生という観点から整理するならば, それは, 明らかに, 音声か非音声かという問題ではない. またその高度さ (例えば人間の言葉のやりとり) と素朴さ (例えば犬

の喧嘩) といった問題でもない。音声身振りを非音声的な身振りから区別するもの、それは、身振りを行った本人も、他者と同様にそれを受け取ることができる、という再帰的性質、しかもそれが進行中の相互行為プロセスにおいて、自身に対して他者と同時的に再帰的である、という、同時再帰的な性質に他ならない。⁽³⁾ しかも、この区別は、明らかに、行為者の観点からの区別である。音声身振りは、ミード自身明確化していないが、このような区別に基づいて、自己を発生する装置として論じられているのである。

しかしながら、こうした同時再帰的な音声身振りと、非同時的再帰的・非音声的な身振りという、身振りのふたつの区分は、即「音声身振りによる会話」と「非音声的な身振りによる会話」という、レベルの相異なるふたつの身振り会話の区分へ、と向かうものではない。

このことについて、論を進めるために、今一度、ミードの「身振り」という概念それ自体に含まれる「社会的行動主義」的な着想に目を向けてみる必要がある。

(2) 社会的行動主義の「身振り」概念

身振りについて、ミードは述べる。

「……身振りは、そもそも、社会的行為の最初の外的な位相である。社会的行為とは、ある個人が、その振る舞いを通して刺激を与え、他の個人に反応を喚起する、ということが行われていることを言う」(Mead: 1909: SW 123)。

「ほとんどの社会的刺激は、社会的行為——その行為が影響を及ぼす他の個体に対して刺激となる——の初めないし初期の段階に見出される。これが、身振りの領域である。……(中略)……こうした身振りの領域は、個人を単に物理的対象としての他の個人に関連づけるだけでなく、彼を、まだ示されているのみの彼らとの行為との連動の中に位置づけ、これらの社

会的活動に対して適切な本能的な反作用を生じさせる」(Mead, 1912: SW 135-136).

「個体の振る舞いの初めの指示や態度は、特に重要な刺激であり、ヴァントの語彙を広く使えば、『身振り』と呼ばれる。……(中略)……これらの身振りは、あるはっきりとした反作用、高度に組織化されたあらゆる個体にとってある部分あらかじめ予想のつく反作用を喚起する」(Mead: 1922: SW 242).

「『身振り』という語で私が言っているのは、ある社会的行為に関わっている個人の行為ないし態度の一部のことで、それは、他の個人がその全体の行為の中で自分のパートを遂行するための刺激として働く。このように定義される身振りの実例は、人込みの中で誰かとすれちがう際にわれわれが反応する他者の態度や動き、誰かの視線に対して振り向くこと、威嚇的な身振りに対する敵対的な態度、人間の声の様々な抑揚についてわれわれが仮定している無数の態度、またボクシングやフェンシングをする人の動きの示唆や態度などであり、これらに向けて、われわれの反応はうまく適応していくのである」(Mead: 1924-1925: SW 286).

「身振りは、社会的行為の部分であり、そのプロセスを完成するための刺激として働く」(Mead: 1927 CL: IS 142).

身振りは、第一に、社会的行為——ミードの定義によれば「二人以上の個人の協同を含む行為のクラス」(Mead: 1924-1925: SW 279)——の部分であり、第二に、まさにこうした社会的行為を可能にしている、個人間の刺激と反応のやりとりの中で、他者にとって刺激となるものを言う。

身振りをこのように捉え、しかも個人間のやりとりをこのような身振りによる「身振り会話」と捉えるミードの着想を、単純だが次のような状況に当てはめてみる。今、個人AとBがいて、仮にミードの挙げた例のように、人込みの中で、互いに接近し、すれちがおうとしていたとする。AがBに笑顔で手を振り、それに気付いたBが、Aに笑い返し会釈をする。こ

の場合、

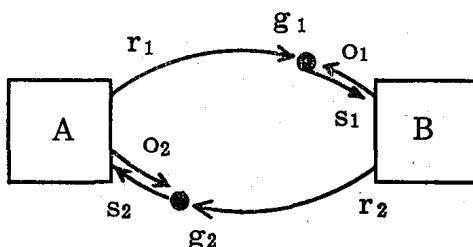
- ・ Aの行為 = Bに向かって挨拶すること → Bへの刺激
- ・ Bの行為 = Aに向かって挨拶すること (Aに対する反応) → Aへの刺激

となる。だが、もし、Aが、Bにではなく、Bの背後にいるCに手を振っていたとしたらどうか。Bはそれに対して、Cの存在に気付かぬまま、それを自分に向けられたものと受け取り、Aに向かって笑い返し、会釈する。このとき、両者の間に見られる相互行為は、

- ・ Aの行為 = Cに向かって挨拶すること
- ・ Bの行為 = Aに向かって挨拶し返すこと

のやりとりであると言えるのであろうか。ミードの「身振り」の着想に基づくなら、そうではない。Aの行為——Cに向かって挨拶すること——は、Bにとって、Cに対する挨拶ではなく、自分に対する挨拶、自分に向かって手を振ったというものである。また、だからこそ、そうしたAからの刺激に対して、BはAに向けて反応を起こしていることになる。Bにとって、Aが行ったことは、少なくとも、この時点では、自分に向かって笑いかけ手を振った、ということであり、それが、BにとってのAの身振りで

r_1 : A's response
 g_1 : A's gesture observed by B
 o_1 : B's observation
 s_1 : stimulus to B



r_2 : B's response to s_1
 g_2 : B's gesture observed by A
 o_2 : A's observation
 s_2 : stimulus to A

図 2

ある。つまり、

・ Aの行為=Cに向かって挨拶すること → Bへの刺激

=Aの身振り —— Bに向かって挨拶すること

・ Bの行為=Aに向かって挨拶すること (Aの身振りに対する反応)

Aの身振りを、他者Bにとって行為者Aから受け取る刺激である、ということは、このようなことを含意しているのである(図2)。

Aの身振りについて語ることは、Aの行為について語ることと同じではない。「身振り」と「行為」とに、関連があるとすれば、それは、端的に、Aの身振りが、Aの行為に由来しているということ、ミードの言葉を借りれば、身振りは、行為の「部分」あるいは「外的に開かれた位相」であるということである。今、行為者から何らかの刺激を、ある他者あるいは行為の観察者が受け取るとすれば、その刺激はなるほど、行為者の行為に由来している。ただし、他者・観察者が受け取るのは、ここでの用語法に則れば、行為者の行為ではなく、そこからの刺激——それによって他者・観察者は何らかの反応を喚起される——であり、それが行為者の身振りなのである。いわば、他者・観察者の受け取った刺激を、他者にではなく、他者の観点から行為者に帰属させたとき、それを、身振りというのである。

「作法を心得た者が、人に椅子を勧めることは、ほとんど本能的なことである。それは、個人の態度以外の何ものでもない。観察者の観点からは、それが身振りなのである」(MSS: 15) (下線筆者)。

行為が、「生物体の、環境に対する反作用の総体、ベルグソン的な言い方をすれば、生物体自身と環境との関係によって、特に“切り取られた”対象に対する、反作用の総体」(Mead: 1922 SW 242) であるとするならば、身振りとは、他者・観察者が行為者の何らかの行いに臨んで受け取った刺激であり、その観点を通じて“切り取られた”行為のある局面(部分)なのである。

従って、機能という点から言うならば、身振りは、それが帰属する行為

者の、何か内なるものを表現するなどという機能を果たすものではない。もちろん、身振りはその観察者に、行為者がどのような気分や感情を持っているのかを示す、ということを、われわれは日常的に経験している。Aの親しげな笑顔は、BにAの気分や感情といったものを、ある種、示している。だが、それは、BがAの身振りを、何らかの気分・感情といったものと、推論的に結びつけている限りで、そうなのである。身振りの機能は、それよりも、行為者とその他者の間の刺激と反応の相互適応である。

「……身振りが、その観察者に対して、感情をあらわにするとしても、その機能は、感情をあらわにしたり、表現したりすることではない。活動やその準備状態の抑制や、他の個人の振る舞いに対して適応しようすることが、高まるエネルギーが出口を求めるなどを含むとしても、余剰のエネルギーを解き放つことが、身振りの機能なのではない。いわんや、身振りの中に、感情的意識の精神物理学的な相対物を求めるなど、適切な解釈ではない。身振りの第一の機能は、変化しつつある社会的刺激に対する社会的反応の相互的な適応であり、そのとき、刺激と反応とは、社会的行為の開かれた位相に見出されるのである」(Mead: 1910: SW 125)。

「……身振りによって、社会過程に巻き込まれている他の個体の行動に対して、適切な反応が可能になる。どのような社会的行為内でも、適応が、身振りという手段を通じて果たされる……」(MSS: 13-14n)。

さらに言えば、この場合の適応は、何らかの適応完了の状態を志向する、というものではなく、端的に、相手の変化していく刺激に、たえず対応し、そのつど自分の行為を変化させ、また相手、ひいては自らの環境を変えていくプロセスを言う。ミードの適応という概念を用語解説するミラーの言を借りるなら、「生のプロセスは、一連の適応と再適応である。有機体は、決して平衡の状態に置かれることはなく、『未来』に向けて努力し生きているのである」(Miller: 1973: 30)。

こうした「身振り」の概念化は、ミードが自らの行動主義——社会的行

動主義——のアプローチとして論じた「他者によって観察されるものとしての行為という観点からのアプローチ」(MSS: 2) と、一貫するものであり、その意味で、「身振り」とは、すぐれて社会的行動主義的な概念(草柳: 1985)なのである。

身振りとは、社会的行為の部分であり、他者に対する刺激であり、その機能は、行為者の内なる何ものかを表現することではなく、行為者とその他者・観察者との間の相互適応を媒介することにある。身振りは、行為者の行為に由来しつつも、他者の観察にこそ依拠するものなのである。そして、ミードによれば、相互行為のプロセスは、このような身振りのやりとりによる会話である。

III 「身振り会話」としての相互行為

(1) 観察者の観点からの身振りの一元化

こうしてミードは、相互行為プロセスを、「身振り会話」として概念化した。この含意をさらに明らかにする必要がある。

先に述べた通り、ミードは、自己の発生の問題を論じるに際して、身振りの中から、同時再帰的なものとしての音声身振りを特化し、非同時再帰的な身振りと区別した。そして、犬の争いという例に示されるような、自己を生じえない身振り会話と、人間が言葉を使って行うような、自己を生じる、音声身振りによる会話とが、いわば二段構えで論じ分けられた。このとき、前者を、自己を生じえないという意味で、よりプリミティブな相互行為のあり方、後者をより高度な相互行為とし、前者から後者へと、相互行為は移行し、レベル・アップする、という発生論的な理解が、ひとつにはあったように思われる。自己を生じえないやりとりから自己を生じるやりとりへ、あるいは犬の争いから人間の会話へ、よりプリミティブなものからより高度なものへ、つまりは、非音声の、身体的身振りの会話から

音声身振り会話へと。だが、ここでいたずらに、身振り会話の発達段階説に傾倒するならば、そのような文脈の中で、ミードの身振り・音声身振りの論じ分けを整理・理解し終えたとするならば、ミード「身振り会話」論の含意を捉え損ねてしまう。「非音声的な身振り」と「音声身振り」の区分が、非音声か、音声かといった問題ではなく、また素朴さと高度さを問題にしているのでもないことはすでに述べた通りである。二つの身振りの区別の含意は、相互行為の発達史ではなく、相互行為の進行、そのメカニズムにおいてこそ、捉えられねばならない。自己の発生という問題をめぐって導入される、非音声身振りと音声身振り、という二つの身振りの区別は、即、「非音声身振りによる会話」と「音声身振りによる会話」の区別の設定に向かうものではなく、いわんや、プリミティブな身振り会話から、より高度な音声身振りによる会話へ、といった、相互行為の段階設定に向かうものでもない。

そればかりか、ミードは、身振りに関して、一方で、音声身振り・非音声身振りの区別を明確にしつつも、一元論の立場を取る。犬の争いも、人間の言葉による会話も、一様に「身振り会話」である。彼によれば、言語もまた「高度に特殊化された身振りの一形態に他ならない」(Mead: 1909: SW 132) のである。厳密に言えば、身振りには、非音声で、つまり再帰的性質をもたない身振りと、同時再帰的な身声身振りとがある、というのではない。身振りを行う行為者の観点に立つ限りで、身振りの内のあるものが、彼にとって同時再帰的な音声身振りを成しているのである。そして他者にとっては、こうした区別とは関わりなく、あるのは、唯一身振り——そのうちある部分が行為者にとって同時再帰的な身振り——である。相互行為のプロセスは、行為者の観点からは区別される非同時再帰的・非音声的な身振りと、同時再帰的・音声身振りとが、混然一体となって、ひとつの身振り会話として進行するプロセスなのである。

例えば、路上である人物Aが他者Bに道を尋ねる、という状況を想定し

よう。Aは「ちょっとお尋ねしますが、」と切り出す。Aのこのことばは、Bに対するのと同様、Aにとっても受けとめうる（聞ける）同時再帰的・音声身振りであり、Bの反応（「はい、何でしょうか」と間に応対する）と同様の反応をAにも引き起こしうるものと仮定できることから、その意味で、有意味シンボルである。実際Bは、Aの言葉に対して「何でしょうか」と応対したとしよう。このときAとBの相互行為を、ミードのいう身振り会話として捉えるなら、両者のやりとりを媒介しているものは、Aの行為でなく、Aの身振りであり、従って、Bが刺激として受け取っているものが問題となる。こうして、行為を発した行為者の側から、他者の観察へ、と視点をシフトするならば、この相互行為を媒介しているのが、同時再帰的身振り、有意味シンボルである音声身振り（のみ）であるとは、明らかに、言えない。Bが受け取っているAの身振りは、Aにとっての同時再帰的・音声身振りにとどまりえない。否、それを遙かに越えている。BはAの身体から、社会的行動主義の言い方をすれば、観察可能な限りの刺激を受け取っている。例えば、Aは親しみ深そうににこにこしながら声を掛けたのか、Bを見下し横柄な様子なのか、オロオロと途方に暮れているのか、あるいは、グレーのスーツを着たサラリーマン風の男性なのか、長い髪の女子学生なのか……。ミードの言葉を援用すれば、もはや「社会的対象（つまり、反応する相手としてそこにいる他者それ自体）が、身振りになる」（Mead: 1912: SW 137）（（ ）内筆者）のである。「幼い子供にとって、彼の周りの笑顔やしかめ面、身体の態度、差し延べられた手が、最初の単純な刺激であり、それによって子供は、そうした身振りに対する彼なりの本能的反応を、喚起される」（Mead: 1912: SW 137）（下線筆者）というわけである。

人が、「窓を閉めて下さい」と言う時、それは、同時再帰的な音声身振りである。だが、他者は、それだけでなく、笑顔と丁重な物腰、あるいは愛想のないぶっきらぼうな態度等々を含めた身振りを受け取って、それに

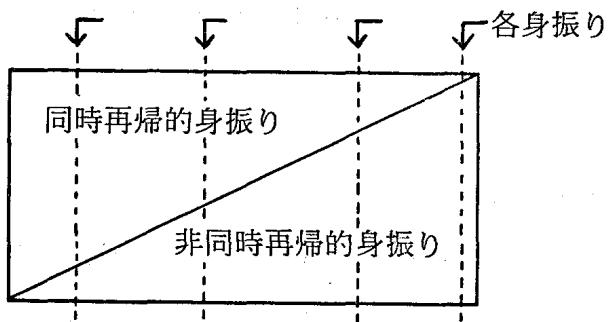


図 3

対して反応する。他者は「はい」という音声身振りと共ににこやかに静かに窓を閉めるかもしれないし、何も言わず乱暴にぴしゃりと窓を閉めるかもしれない。あるいは、ただそこを立ち去るだけかもしれない。

とすれば、行為者の観点から問題となる同時再帰的・音声身振り自体は、Bが受けとる、Aの身振り全体のごく一部に過ぎない。仮にBが目が見えなくても、BはAの声の中に、ミードの言う「様々な抑揚」という、有意味シンボル—同時再帰的・音声身振り以上の何ものかを受け取っているであろう。行為者の観点からは、身振りは、一方に、同時再帰的なものを全く含まない身振り、非同時再帰的なものを全く含まない身振りを両極とする、その間のどこかにある、ということができるであろう。(図3)⁽⁴⁾そして、他者・観察者の観点からは、行為者にとってのこのような区別に関わらず、いわば両者が混然一体となった身振りが、相互行為を媒介する。そして身振りとは、あくまで、他者に受けとられるものとしての身振りである。

(2) 一元論的身振り会話の含意

こうした身振りに媒介されて、われわれのプロセスが進行するとなれば、それは、いかなるプロセスであるのだろうか。

第一に、このような相互行為は、ミードの言うところの、行為者にとっての「不完全性」を、常にはらむことになる。すなわち、身振りのうち、

ある部分は、それを発した行為者にとって同時再帰的であるのに対して、非同時再帰的・非音声身振りは、それを行ったとされる行為者自身にとって、「その価値を不完全にしか感じることができない」(Mead: 1912: SW 136) とされる、この不完全さである。人は、ことばを発して会話するが、それは、微笑みながらであり、あるいは、眉間にしわを寄せながら等々である。そしてそれら非音声的な身振りが、行為者にとって「その価値を不完全にしか感じることができない」ものとされる限り、われわれの相互行為には、行為者にとって、常に、この「不完全性」がつきまとうことになる。逆に言えば、「他者は個人が自らを知る以上に、その個人のことを知る」(Natanson: 1956: 60)⁽⁵⁾ のである。

第二は、「他者依存性」である。身振りは、「他者によって観察されるものとしての行為という観点からのアプローチ」(MSS: 2) を主張する社会的行動主義の下にあって、他者の観察に依拠するものとして、着想されているため、原理的に、行為者がどのような身振りをしたか、ということは、その観察者の観察いかんに依存することになる。つまり、行為者が、あることを他者に向けて行ったなら、その行為者は、自分が相互行為のプロセスというフィールドにおいて何をしたのかということを、他者よりも、不完全にしか知りえない、ということであり、結局、行為者が何をしたのか、ということは、他者が彼の行為をどのような身振りとして観たか、に依存する、ということに他ならない。

このような「不完全性」と「他者依存性」を踏まえるなら、われわれ個人個人は、相互行為におけるあらゆる行為について、「行為者である私には、私が他者に対して何をしたか、ということは、自分自身では、不完全にしか分らない。それは、他者の受け取り方次第である」といった状況に身を置くことになる。それは、少なくとも、行為者が、行為し、その行為に託されている何かが他者に“伝わる”，という状況ではない。

とはいって、相互行為のプロセスに巻き込まれるあらゆる行為者が、互い

に、自分の身振り感受の不完全性、他者依存性によって、自分の行為を行った瞬間から放棄していく、という、ある種、行為の無政府状態に置かれているわけではない。ミードは、そうはならない根拠を、その議論に仕込んでいく。その第一は、端的に、音声身振り、より厳密には、同時再帰的なそれが、存在する、ということである。今一つは、主にこの音声身振りに支えられて、行為者自身が同時に自分自身にとって他者たりうる、つまり、自分を他者の立場から観ることができる、ということ、逆説的だが、ミードの用語法に従えば、個人は自己である、ということにある。自分の身振りについて、他者の観点から観察する、ということができればできるほど、ミードの言う不完全性の度合いは低下する。そして、他者の受け取り方及びそれに対する反応の仕方について、熟知していればいるほど、「他者依存性」は不透明なものではなくなっていく。このことに言及するのが、他者ないし一般化された他者の態度ないし役割の取得、という考え方である。

「個人は、もちろん、彼の社会的行為にあれやこれやの仕方で関わる無数の他者の態度を仮定しあしない。こうした他者たちの態度が、同様の状況下で同一であるという場合を別にすればであるが、人は一般化された他者の態度を仮定するのである」(Mead: 1924-1925: SW 291)。こうした他者・一般化された他者の態度ないし役割の仮定・取得を通じて、個人は、自分を他者の立場から対象化し、自分のしたことに対して他者として反応することが可能になる、とされる。その限りで、自分の身振りの価値を「不完全にしか感じることができない」状況に、ある程度、他者の観点あるいは態度を以て、対処する。そして、こうした態度の一般化の可能性の限界が、一つの集団ないし社会の境界であり、この境界を越えると、自分の身振りの感受に対する不完全性の度合いも、一挙に高まる、ということになるのである。たとえば外国で、人は、自分の行為の“意味”が周囲に“伝わらない”と感じられる状況よりも、自分の行為が、どう伝わったの

相互行為への「身振り会話」論的アプローチ

か、相手がどう受け取ったのか、自分にはわからない、という状況に不安を覚えるのである。

ミードはさらに、「有意味シンボル」なる概念を導入する。そして、有意味シンボル及びその体系こそが、このような相互行為プロセスにおける不完全性を、最も効果的なかたちで減縮させる装置として、設定される。これを優先的に用いることによって、付随する他の、主として非音声的・非再帰的な身振り、つまり、不完全性のつきまとう身振りを、行為者と他者は互いに、"括弧に入れる"ことが、可能になる。われわれは、この有意味シンボルだけに、観察の焦点を合わせ、それ以外の身振りに関しては、括弧に入る、という相互行為、不完全性を減縮させた相互行為を行うことができる。それでも、この不完全性は、われわれの身振りにつきまとっている。それは、私という身体が、相互行為プロセスにおいて他者によって観察可能であるほど、私自身にとっては観察可能でない、ということの、ひとつの帰結として、われわれの相互行為プロセスを特徴づけている。

身振りの「他者依存性」もまた、ミードの議論において、行為者にとって、自分の行ったことを、他者の観察に委ねるままとなることを意味しない。なぜなら、ミードによれば、身振りの機能は、第一に、相互適応だからである。身振りは、相互行為プロセスというフィールドにおいて、それを受け取った個人相互に、適応的な反応を喚起する。そして、その反応は、最初の身振りを発した行為者に対して、新たな刺激として、返ってくる。つまり、このときになって、行為者は、自分が他者に対して何をしたのか、ということを、それに対する他者の反応というかたちで、遅ればせながら、しかしながら最も手っとり早く、知ることができるのである。

「個人が、他者の自分に対する態度を取得し、自分の行為によって、他の個人に引き起こされるような行いをする、という傾向を、ある意味で、自分自身の中に生じさせるならば、その限りで、彼は、自分自身に対し

て、彼の身振りの意味を指示することができる」(Mead: 1922: SW 244)。そのような「一般化された態度によって、自己にも他者にも示される時、反応は意味になる」(Mead: 1922: SW 247) のである。ここでは、行為は、行為者から他者へと、行為者側が行為に託した意味を、他者に伝える、というものではありえない。自分が行ったことの意味は、他者の反応というかたちで、行為者に、返される。そして、今度は、最初の行為者が、他者の反応を刺激として受け取り、その身振りに対して適応的に反応する。そして、この反応が、相手の身振りの意味となるのである。身振りの他者依存性は、意味の他者依存性でもあるのだ。

IV まとめ——身振りと適応という問題

ここまで、われわれは G. H. ミードにおける相互行為を、「身振り」及び「身振り会話」という考え方を通して、クローズアップしてきた。相互行為プロセスは、刺激と反応の連鎖として捉えられ、ミードの議論において、自己発生等の問題を論じる枠組みをなし、またそこから同時に、個人は、相互行為というプロセスにおいてこそ個人たりうる、言わば「相互行為・内・個人」として捉えられた。このような相互行為は、身振り会話として概念化された。そして、その枠組みの中で、自己の発生原理を説明するに際して、ミードは、「音声身振り」という概念を導入し、自己の発生に関与する特別な身振りとして、他から区別した。その区別は、音声 / 非音声の区別という体裁を取りつつ、実は、進行中の相互行為プロセスにおいて、行為者も他者と同時・同様にその身振りを受け取ることができるか否か、という行為者の観点からの身振りの同時再帰的性質に求められた。これらを明らかにした上で、われわれは、「身振り」概念に戻り、その「社会的行動主義」的含意を検討し、相互行為が、行為者にとっての上記の二区分に関わらず、他者の観点から、一元的に、同時再帰的 / 非同時再帰的

相互行為への「身振り会話」論的アプローチ

含めた全体としての身振りのやりとりとして進行するものであることを論じた。そして、それゆえ、われわれの相互行為には、行為者にとっての「不完全性」、及び、「他者依存性」、というふたつの特徴が刻まれている、ということを論じた。しかしながら、ミードは、こうした「不完全性」を減縮させるものとして、「音声身振り」「有意味シンボル」「自己」「一般化された他者の態度ないし役割の取得」等の概念の設定し、また「他者依存性」については、他者の反応=身振りの意味、という着想を用意することで、行為者に、他者からの反応というかたちで、その意味が差し戻されるプロセスを論じ、われわれの相互行為プロセスが、適応の不斷のプロセスとして進行していくことを論じたのである。われわれは、以上のことを見た。

最後に、このような身振り会話としての相互行為論が、われわれ自身の相互行為に対するどのようなアプローチの視点を提供しうるのか、ということについて述べたい。

第一に、われわれの相互行為において、相互適応を媒介するものを、ミードのいう身振りとして捉えることによって、そこに、実際に様々な“身振り”を見出すことができる。身振り、すなわち、他者によって観察される行為者から他者への刺激、それには、言葉から、社会的対象としての個人その人の姿、顔の表情から声の抑揚、服装等々までが広範囲に含まれる。それらのうちのあるものは、行為者にとって同時的に再帰的であり、あるものはそうではなく、またあるものは有意味シンボルであり、あるものはそうではない。また、ある部分は、他者にとって優先的に観察の焦点となって受け取られ、ある部分は、括弧に入れられる。だが、それらはいずれも、確かに身振りとして受け取られ、それに対する適応的反応を方向づけ、またその調節を反応者に迫るものであり、その限りで、われわれの相互行為プロセスの進行に、鋭く関与している。このことを、ミードの「身振り会話」相互行為論は、われわれに示し、同時に、このように捉えた相

互行為の考察へと、われわれを導くのである。⁽⁶⁾

第二に、行為者とその他者（たち）が、互いに対して、どのようにして適応していくのか、という問題が、クローズアップされる。身振りの機能は、相互適応であった。しかも、その適応は、相手の身振りに対する自分の反応（相手にとって身振り）という、身振り間のやりとりとして続けられしていくものと、捉えられるゆえに、適応的反応を起こす行為者の側の内なるものとの関わりによって論じられるよりも、相対している行為者と他者・観察者との関わりによって、論じられるものとなる。行為者にとっては、適応は、他者によって観察される限りで、どのように振る舞うか、という問題として捉えられることになる。他者の観察によって映しだされた相互行為プロセスというフィールドが、適応のフィールドである。そこでは、人は、他者のように振る舞うことによって、そのプロセスに、問題なく巻き込まれていくことができる。あるいは、たとえ彼がしようと努力しても、他者の目にそう見えなければ、そのプロセスに問題なく巻き込まれていくことができない。彼の内的なものは、そこでは、観察可能でない、という限りで、問われない。そもそもミードによれば、身振りの機能は、そうした内的なものを表現したりすることですらない。このような相互行為プロセスは、一方に、誰に対しても開かれたプロセス、観察される限りで他者のように振る舞うことで参加が可能なプロセス、進行中の他者とのやりとりそれ自体を手掛かりとして“見様見真似”で参加することが拒まれない、言わば緩やかな、開かれた社会を、われわれにイメージさせるものもある。⁽⁷⁾ と同時に、他方で、他者のように振る舞っていると観察されない者、あるいは、集団ないし社会の一般的な他者とは異なるしを観察された者を広い意味で排していくメカニズムのあり様を、示唆するものもある。

また、逆に、他者たちが、行為者に、いかに適応を迫るのか、という問題も、同様の文脈で、クローズアップされよう。すなわち、他者の反応

が、行為者の身振りに意味を与えるのだとすれば、行為者は、自分の身振りの意味をあらかじめ知ってはおらず、他者に反応を返されたときに、それを知る。その一方、行為者自身も、自分の発した身振りのうち、同時・再帰的な身振りを自身で受け取ることによって、それに対して反応することができるとされている。そのふたつの反応——他者の反応と自分自身の反応、一方は実際に発せられ 観察可能であり、他方は潜在的である——が、同様のものであれば、彼の身振りは、有意味シンボルであるのだが、そこには常に、両者の反応のある程度の乖離の可能性がはらまれていることになる。この乖離が、相互行為 プロセスという フィールドにおいて、問題状況を生み出す場合・生み出さない場合、行為者の経験において、意識される場合・意識されない場合、等々の場合が想定されるであろう。もちろんすべての乖離が、行為者・他者間で、問題状況として経験されまた意識されるわけではない。ミードによれば、「……行為において、刺激と反応の間の適応が完全であればある程、われわれは、反応それ自体について、意識しない。不完全な適応を、われわれは、動きの不器用さ、ぎこちなさ、間の悪さや、統制のとれていない反作用等として意識する」(Mead: 1910: SW 126) のである。だが、そのように意識された場合には、その乖離を收拾しようとする、收拾しない、という、相互の態度の変更・不変更が考えられ、前者はさらに、行為者が他者の反応の側へと自らの反応を補正する、逆に、他者に対して反応の修正を迫る、という二方向がありうる。前者の場合、すなわち行為者が、主に他者たちの反応に合わせて、次回以降の反応を、"他者らしく" 修正する方向に向かうとき、それは、教育や社会化、ある集団や組織への、行為者の適応 (Accommodation) や同化 (Assimilation)⁽⁸⁾ といった効果を生み出すであろう。しかしながら、「社会的適応のプロセスは重要である。だが、適応に合理性を与える条件とは、他者の態度が集団の態度であること、つまりそこに、われわれが集団全体の態度を見出しているということ」(Mead: 1927 CL: IS 150) であるとす

るならば、場合によっては、行為者は、他者からの変化する刺激に対し、自分自身の反応ないし態度を変化させない、という状況も生じうる。

これらの、身振り会話をめぐる問題は、人々が集団に参加していくということ、さらには個人の参加による集団への影響等々といった問題を扱う一つの手立てをわれわれに与えてくれる。それは、ミードの相互行為論を通じてわれわれに与えられる、さらなる新たな課題である。

注

- (1) G. H. ミードをめぐる論史については、後藤将之 1987『ジョージ・ハーバート・ミード』が詳しい。
- (2) 岩城（草柳）千早 1987「G. H. ミードの『社会的行動主義』——相互行為プロセスへのパースペクティブ」社会学評論第 38 卷第 3 号を参照されたい。
- (3) 付け加えるならば、この音声身振りの同時再帰的性質は、音声身振りのみに備わるものではない。身振りを、同時再帰的なものとそうでないものとに分けるなら、前者には、音声身振りだけでなく、自分の手の動き等も含まれよう。「われわれは、自分の音声身振りを、他者が聞くように聞く。われわれはまた、自分自身の手の動きも、他者と同様に、見たり感じたりするだろう。そして、それらの眺めや感じは、生まれつき耳の聞こえない人や目と耳が不自由な人にとって、音声身振りの位置を占めている。だが、人間社会の社会組織化のメディアをもっぱら提供してきたものは何かといえば、それは、音声身振りであった」(Mead: 1924-1925: SW 287)。
- (4) こうした身振りについて、さらに考察していこうとするならば、音声・非音声、再帰的・非再帰的、が問われるだけでなく、行為者・観察者それぞれが、それに対してどのように意識的であるのかないのか、といった問題も発生してこよう。
- (5) ナタンソンは、ミードの自己論における I・Me と時間性という問題を論じる中で、I が「自己によってその行為の中で把握されえず、後になって、その行為がすでに達成された後に、喚起したり思いおこしたりすることができるにすぎない」(Natanson: 1956: 60) ものであることを指摘し、「行為の中にある個人を見るのは他者のみ」(Natanson: 1956: 60), また「シェットが言うように、私の『I』を直接把握する唯一の特権を持つのは他者である」(Natanson: 1956: 88n) ことを述べている。そこで問題とされている、I・

Me 及び時間性というテーマについては、本稿では立ち入らない。

(6) 他者によって観察される身振りによる、無言の、すなわち非音声的な身振りによる会話が、近年の若者の間で、特に重要なコミュニケーションになっている、ということが、しばしば指摘されているようである。1986年2月12日の朝日新聞は、若者の文化について、つぎのように論評している。「ファンションは、いまの若者の最大のコミュニケーション手段である。他者の視線による見かけが最大の会話であって言葉を使う政治経済の話はダサい。男女が相手を選ぶのも服装・おしゃれといった外観が重大な要素となる…(中略)…何を着ているかは若者の自己確認の面が強いとともに、どのグループに属している人間かをも定義づけてくれる」(朝日新聞1986年2月12日夕刊)。

(7) このような相互行為の捉え方を、ミードの取り組んでいた社会状況、今世紀初頭のアメリカ社会の中で捉え直してみると、可能であろうか。パークとバージェスが著した社会学の教科書「社会科学への入門」には、「適応」、「同化」というそれぞれふたつの章が設けられ、この問題が、社会学的問題として重要性を持っていたことを示している。適応については、その型を論じながら、次のように述べられる。「自然化、これは、もともとの意味によれば、人が『自然体』になっていくプロセスを意味する。すなわち、異邦の社会的環境に馴染み、そこが自分の居場所であると感じられるようになっていくプロセスを言い、アメリカでは、外国人が市民権を獲得していく法的プロセスを表す。だが、社会的プロセスとしての自然化は、本来、法的な儀式よりももっと根本的な何かである。そこには、フォークウェイズやモーレス、因習、さらにその社会の儀礼への適応が含まれる。また、新しい社会集団の記憶や伝統、文化といったものへの、少なくともある程度の参加ということも含まれる。『郷に入れば郷に従え (In Rome do as the Romans do)』という諺が、自然化の基本原理なのである。コスモポリタンとは、新しい社会的環境の行為のコードにたやすく適応する人を言うのである」(Park and Burgess: 1921: 306)。また同化については、こう語られる。「この(同化の)問題は、アメリカでは、諸民族が旧い国の政治的忠誠を捨てて、この国に自主的に移住し、この新しい国の文化を徐々に獲得しつつあるということの中から、生じている」(Park and Burgess: 1921: 359)。またアメリカ化を同化の問題として扱おうとする中では、「…アメリカ化とは、『移民が自分の住んでいるコミュニティの生活に参加すること』である。この観点から、参加は、同化のメディアであり、ゴールである。アメリカの生活のどの領域にでも参加すれば、それが、他の生活領域への参加への準備となる。移民や外国

人にとて最も必要なのは、参加の機会なのである」(Park and Burgess: 1921:364) と述べられる。

(8) 前掲、パークとバージェスによって使われた語彙である。

文 献

後藤将之 1987 『ジョージ・ハーバート・ミード』 弘文堂。

岩城(草柳)千早 1987 「G. H. ミードの『社会的行動主義』——相互行為プロセスへのパースペクティブ」『社会学評論』 第38巻第3号。

草柳千早 1985 「『自我』への社会的行動主義のアプローチ——観られること・観ること」『現象学的社会学——意味へのまなざし』 江原由美子・山岸健編. 三和書房 176-190.

Mead, G. H., 1909 "Social Psychology as Counterpart to Physiological Psychology", in SW 94-104.

——— 1910 "Social Consciousness and the Consciousness of Meaning", in SW 123-133.

——— 1912 "The Mechanism of Social Consciousness", in SW 134-141.

——— 1914 CL: 1914 Class Lecture in Social Psychology, in IS 27-105.

——— 1922 "A Behavioristic Account of the Significant Symbol", in SW 240-247.

——— 1924-1925 "The Genesis of the Self and Social Control", in SW 267-293.

——— 1927 CL: 1927 Class Lecture in Social Psychology, in IS 106-175.

——— 1934 'Mind, Self, and Society'. The University of Chicago Press. (MSS).

——— 1964 'Selected Writings', Andrew J, Reck (ed.). The University of Chicago Press, (SW).

——— 1982 'The Individual and the Social Self: Unpublished Works of George Herbert Mead'. The University of Chicago Press. (IS).

Miller, David L., 1973 'Geoge Herbert Mead—Self, Language, and the World'. The University of Chicago Press.

Natanson, Maurice, 1956 'The Social Dynamics of George Herbert Mead' Martinus Nijhoff 1973.

Park, Robert E. & Burgess, Ernest W, 1921 'Introduction to the Science of Sociology'. The University of Chicago Press 1970.